

アフリカ現代美術「第三世代」試論—キング・フンデックピンクと陶芸を起点に

中村 融子（京都大学）

ベナン系フランス人アーティスト、キング・フンデックピンクは、21世紀美術の越境的な性格を体現する人物である。1987年生まれのフンデックピンクは、アフリカ現代美術シーンで初期のキャリアを構築した。また日本の備前焼を学習し、焼締陶の技法とブードゥー教の実践に共通点を見出し独自の様式を確立した。アメリカの著名な批評家に見出されて以降は、欧米のセラミックシーンでも活躍を始め、滋賀県立陶芸の森でのアーティスト・イン・レジデンス（滞在型制作プログラム）を契機に日本の現代陶芸シーンにも参入する。彼の事例を通じて、グローバル化する現代美術における西洋近代の中心性の相対化、「脱植民地化」のメカニズムの一例を示す。

アフリカ諸国は、独立後に国民国家形成が停滞・挫折した影響を受け、公的な美術制度は脆弱である。しかし、『大地の魔術師たち』展（1989年・パリ）を大きな契機に、独特な方法でアートインフラを構築し、国際的な美術シーンにおける主体性を取り戻してきた。この現代史を、アートエコシステム（作品の価値付けをめぐる有機的な相互関係）に着目し、展示履歴やマーケットの動き等を全て包括した生態系の営みとして記述する。すると、フンデックピンクは、アートセンター等によって大陸内のエコシステムの涵養が進む「第三世代」のアーティストとしてアフリカ現代美術の発展史に位置づけられる。

次に同様の手法で、彼が受容した、備前焼の近現代史を美術制度との距離に着目しながら記述する。彼が出会った2010年代の備前焼の状況も、グローバルなアートと国家的美術制度、在来の表現の闘ぎ合いの上にある。一方、彼の備前焼学習の背後には、欧米での日本陶芸受とそれゆえにおこる変質（誤解）に向き合う日本人・フランス人陶芸家のイニシアチブがあった。そこに至る、ジャポニスム以降の、フランスにおける日本陶芸の受容史を（特にグレと呼ばれる類型に注目して）辿る。さらに、アメリカでのフンデックピンクの展示・評論は、西洋でのセラミックシーンの発展の文脈でなされている。戦後アメリカでの現代陶芸の動向に着目し、アート・クラフトの階層的概念の現代史の変遷を記述する。

フンデックピンクの特徴は、依然アート・クラフト間の階層区分が残る欧米の国際シーンと、その階層や境界が曖昧な日本の現代陶芸界の双方への参加を通じて、その境界を溶かす新しい鑑賞の言説を開いていることだ。それを可能にした陶芸の森のネットワーク形成の経緯を紐解き、国際シーンに対する日本現代陶芸の立ち位置の変遷を明らかにする。

以上、本発表は、フンデックピンクの背後にある複数の歴史文脈と、それがどのように彼に合流したかを、美術史的手法・人類学的手法を併用して記述し、彼の制作が、西洋近代的な美術の「辺境」に置かれた複数の系譜を繋ぎ合わせることで、西洋近代的なアート・クラフト概念の中心性を相対化していることを明らかにする。